

第2部 大宅映子名誉シュヴァリエ講演会

第2部からは、同じく日本記者クラブ内10階にある「レストラン アラスカ」に会場を移しました。濱野昌子理事の司会進行のもと、評論家で公益財団法人大宅壮一文庫理事長としてご活躍の大宅映子名誉シュヴァリエによる講演会「おいしさこそ命」が行われました。

講演後は、谷本義信理事のセレクションによるコンテ18か月熟成とポーフォール エテが村山重信理事長より贈呈されました。



おおや えい こ
大宅映子氏 EIKO OYAMA

1941年、東京生まれ。1963年に国際基督教大学卒業後、PR会社勤務を経て1978年よりマスコミ活動を開始。国際問題・国内政治経済から食文化・子育てまで守備範囲広く活躍するほか、多くの審議会・委員会の要職を歴任。報道番組等での切れ味の良いコメントは好評。夫、娘2人、孫3人あり。故・大宅壮一三女。2018年に名誉シュヴァリエ叙任。

「おいしさこそ命」

◆両親から学んだ自立の精神

評論家だった父・大宅壮一と、明治生まれでありながら結婚前には教職に従事していた母・昌は、どちらも個や自立を重んじる人で、「自分のことは自分です」という環境の中で私は育ちました。

父は子どもの教育に関して「わが家は雑草のように踏まれても自分で立ち上がるように育てています」と公言していました。大宅壮一文庫も「雑草文庫」と呼び、多くの人が読み終えたら捨ててしまうような週刊誌や雑誌にこそ人間の面白さが詰まっていると考えていました。

◆食は人間をつくる

そんな家庭で育った私は、「衣食住」の中でもやはり「食」が一番好きです。「食は人間を作る」、「健全なる精神は健全なる身体に宿る」だと思います。ろくなものを食べないで、健全な精神は宿らないのです。冷凍食品を使うにしたら、最後に何かひと工夫する。残り物も翌日そのまま出すのではなく、姿かたちを変えて家族に出す。そこが腕の見せどころと考え、楽しんでやってきました。

とはいえ、私が料理に目覚めたのは子供が生まれてからのことです。親になって、子供たちの身体をつくる責任があると感じたのです。私が娘にやったことは孫にも受け継がれると実感しているので、未来永劫責任を負っているという気持ちで今も料理をしています。

◆日本の食はどうする？！

コロナ禍にロシアのウクライナ侵攻が始まり、苦しい日々が続いています。食糧とエネルギーの値段が大幅に上がり、ウクライナの小麦に依存していたアフリカの国々は、すでに17億人がパンを食べられないといえます。日本は大丈夫と思っている人も多いようですが、今の日本の食糧自給率は過去最低の37%。エネルギーも自前は10%もないわけです。どこの国もまずは自国の国民を食べさせなきゃいけないので、今のような状況がさらに進めば日本にはもう売ってくれなくなるでしょう。その時に日本はどうするのか？ 今やらなくてはいけないのは、国産の食材を使うこと、輸入してまで捨てている食品のロスを減らすこと、AIを使った野菜栽培の促進、食材の保存方法を開発することなどだと思います。

「日本には資源がない。人だけが資源」と昔から言われてきました。しかし今は人が劣化しています。一番大事なのは人。そして人の精神を作るのはやはり食べ物だと思うので、これからも私は美味しい食べ物を追求し、子どもたちや孫たちに伝えていきたいです。



司会の濱野理事



レストラン アラスカにて



講演後は感謝を込めてチーズを贈呈しました